

歌唱教材における日本語発音法及び歌唱法についての研究

上田浩平

Study about a Japanese pronunciation way and a song way
in song teaching materials

Kohei UEDA

Abstract

Acquisition of song technology is required condition in a nurture man education school and a kindergarten teacher education school. But the manner of the utterance, the knowledge about pronunciation method when singing, and technology are in the state I don't have mostly actually, and the one I'm entering is the current state. I think it's important to learn the shape of the mouth and the point of view of the tongue as knowledge and link it to song actually to make them acquire efficiently clearly to such student. This research studied the shape of the mouth and the point of view of the tongue every vowel and did the study to link it to song.

Key words : Pronunciation. Song technology. The shape of the mouth. Japanese song.
Tongue.

1. はじめに

筆者は、学生時代より日本歌曲における発音法について研究を続けているが、保育士養成校において学生に対する歌唱教材の指導を行うにあたり、歌唱の際の日本語の発音の難しさを痛感することとなった。保育士養成校に進学してくる学生は、ほとんどが声楽の実技を経験することなく入学してくる。中学校や高等学校での合唱活動程度の経験である。また、

「歌う」となると、日常会話のような発音では、高音を出すことが困難である。そのため、学生は「歌う」ことに抵抗感を抱くことが少なくない。

しかし、保育の現場では「歌う」ことは日常茶飯事である。日々の生活を習慣づけるために、活動の多くに歌が当てられている。例えば、「歯をみがく」「お弁当を食べる」「手を洗う」「お昼寝をする」など、日常の活動をスムーズに且つ習慣づけしやすくするための役割を担っており、「歌う」ことは保育士の必須活動である。

そこで、実際に保育の現場で歌唱される教材を使って、歌唱の際の日本語の発音法について、筆者が研究してきたことをまとめたいと考える。未だ研究途中であるため、本研究が今後の研究に繋がること、また、保育士の音楽活動、子どもたちの音楽活動に役に立つことを願っている。

2. 日本語で書かれた歌唱教材の歌唱法について

私たちは、日常の会話において母国語である日本語で会話をするには不自由も困難も感じることはない。しかし、日本語で書かれた歌唱教材を歌うとなると別である。外国語で書かれた歌唱教材に比べたら歌い難いことを痛感してしまう。その原因の一つとして、日本語が外国語に比べて母音(a. e. i. o. u)の特色が濃く、母音と子音(s. t. m. z...)、あるいは母音のみで一音節を形成しているため歌唱にあたっては根本的に発音しにくいのである。

日本語で書かれた歌唱教材の出発点は、明治期の洋楽のメロディーになじませることを第一に目的とした明治政府の考えからである。歌詞は第二義的に考えられており、多くの日本語歌唱教材のメロディーは讚美歌から用いられており、二部形式の簡単なものである。こうして、讚美歌形式のものが、歌唱という形で大量に生産され、明治20年代になると教科書も増え、単なる訳詞・転調だけではない、日本の名曲が数々生み出されていった。しかし、西欧風のメロディーに日本語の歌詞をのせているため、子音で響きを集める外国語の曲とは違い、言葉が聞き取り難くなってしまふ。また、母国語であるが故に、歌詞の内容がすぐに解釈できるため、表現が先行してしまい、発声そのものが委縮し、次第に声が出にくくなることが挙げられる。日本語は子音が一つの単語を構成する上で、一つの子音に一つの母音がつくため発音上の制限が歌唱に加わってしまう。そのため、子音を最大限無駄なく効果的に活用し、子音に連なる母音の響きを利用する発声技術を習得し言葉を発音することが望まれる。声楽の基盤となる発声技術を修得しなければ、母音の響きに変化を与えることが難しく、歌唱において単調で皮相な表現になってしまう。

発声技術が未熟である学生を研究対象とした際に、日本語の発音による歌唱表現の難しさがよりいっそう切実なものになると考える。しかし、子どもたちの興味・関心を引き付けるには言葉が聞き取れなくてはならない。子音を効果的に使い、母音に自由な色を付けることによって表現豊かに、且つ明瞭な日本語の歌唱ができるようになることを筆者は考える。

(1) 日本語の発音について

① 日本語の母音について

声帯の振動を伴った声が共鳴し、舌の動きや口の形の変化により、ア、エ、イ、オ、ウの5つの母音に分かれる。外国語にはä, ö, üなどの移行型の曖昧母音もある。しかし、ここでは日本語の母音ア、エ、イ、オ、ウについて考察していく。

歌唱において、声帯を無理に振動させたり、共鳴腔を無理に圧迫することなく自然な息の流れが起こっていることが重要である。それと同時に、各母音がむらなく共鳴し同じように発しており、低音域から高音域まで無理なく自由に声を操れることが重要な要素である。すべての母音の基礎となる「ア」を基準に「エ」「イ」は口を平たく狭くし、開放された明るい音が発せられる。それに対して「ア」より口形をつぼめていくと、「オ」「ウ」の母音となり、閉鎖的な暗い母音が発せられる。

(a) ア [a]

日本語の歌唱教材に最も多く現れる「ア」の母音は、母音の中でも最も広く明るいもので、何の意識をすることなく自然に発せられ、一番開放されたものである。日本語発音の中で基礎となるため、充分考えて歌唱しなければならない。日本人の「ア」[a]は平たく押しつぶしたような響きが特徴である。しかしこのまま歌唱でしようすると喉に負担が掛かり、なめらかな母音の響きではなくなってしまう。

この母音の歌唱について具体的に例を挙げて考えてみると「ぞうさん」の15音節の中には7つの「ア」の母音が含まれているが、言葉のアクセントによって、また子音のストレスや名詞や助詞などの役割によって響きが変わってくる。

ぞ う さ ん ぞ う さ ん お は な が な が い の ね
zo - ¹sa n zo - ¹sa n o ²ha ³na ⁴ga ⁵na ⁶ga i no ne

上記の下線の部分にアクセントがくると考えられるが、最初の1の「さ」は語尾であるため、強く発音しないほうが良いと考えられる。そして、日本語独特の平らな「ア」になってはならない。その前の「オ」の母音の中に、「ア」の母音をおさめるように歌唱すると美しい発音になるだろう。2の「は」、3の「な」については、その前の長く伸ばす「オ」の後にくるため、「オ」より明るく発音し、3の「ア」は、2の「ア」に連続するため、子音の「n」のストレスをかりて、言い改めることが必要である。また、4の「ア」は助詞の「が」であるため[ŋ]鼻濁音でやや弱めの「ア」が良いと考える。5の「ア」は3の「ア」と同じく、6の「ア」は4の「ア」と同じ鼻濁音でやや弱めである。以上のように同じ「ア」でも様々な「ア」が要求される。

私たちが日常会話で使用する「ア」母音と、歌唱の際に使用される「ア」母音は上記のように明確に異なる。母国語での歌唱ではあるが、日常会話で使用している母音は使えないのである。特に「ア」母音は、歌唱の際の発音においては研究し尽くされた母音の響きでなくてはならない。

(b) エ [e]

「エ」母音は、「ア」母音より少し上下が狭くなり舌は平らで横に、口形は横に引いた形で発音する。しかし、口形を横に引きすぎると、響きが「ア」母音から離れてしまい調和がとれない響きになってしまいますので注意が必要である。したがって、顎に力を入れることなく「ア」母音と同じ口形を保ちつつ、舌の位置を少し前方へ出すことを意識して発音しなければならない。「ア」母音の口で「エ」母音を発音を必要とする英語の曖昧母音「æ」を意識して発音すると、高音域でも歌唱の際には発音しやすく、また聴き取りやすくなるを考える。

(c) イ [i]

「イ」母音は、「エ」母音をさらに平たくする。横に広く、まとまりやすい発音ではあるが、注意しなければ、平たくなりすぎ硬くつぶれた発音になってしまう。よって、口形を横に引く意識ではなく、「エ」よりさらに鼻腔を意識をした響きでなくてはならない。また、舌の位置は「エ」母音の位置で、舌の横が上の歯に当たるように、少し丸めるとより聴き取りやすい発音になると考える。

(d) オ [o]

「オ」母音は、「ア」母音より少し横に狭く、縦に広がった唇の形で発音する。舌の位置や共鳴腔は「ア」母音と同様に開放された発音である。舌に力を入れず、鼻腔共鳴を意識した自然な発音でなくてはならない。私たち日本人にとっては、少し暗い響きの母音に感じることもある母音である。

(e) ウ [u]

「ア」「エ」「イ」「オ」「ウ」という順で母音の響きが暗くなる。「ウ」母音は日本語の母音の中で一番暗い響きであるが、決して響きが奥に入ってはならない。特に他の母音に比べて母音の響きが落ちやすく、潰れてしまいがちである。意識して響きを明るくしなければ、表情も暗くなってしまう。外国語を母国語とする人々が日本語を発音する際に、私たち日本人が違和感を覚えるのは、「ウ」母音が奥深くに響いているからである。私たち日本語を母国語とする日本人が歌唱する際は、「ウ」母音を最も注意して発音しなければならない。

② 日本語の子音について

息の流れが口腔内で狭められたりし、声帯振動を伴わずに発せられる破裂音や摩擦音であり、有声子音と無声子音に区別される。通常日本語による日常会話では、子音の発音が弱いため、歌唱の際は聞き取れない場合が多い。そのため歌唱の際の子音の発音は、会話より誇張された明瞭な発音が必要となる。これを意識的に行うことによりはじめて言葉が明瞭になり、歌詞そのものが表現している内容と意味が、聞き手に届くのである。それだけではなく、歌唱する側にとっても明瞭な子音の発音によって息を前に集めることができ、正しい発音に導くことができる。しかし子音を強調しすぎると、顎に力が入った不自然な日本語の発音になり、子音だけではなく母音までも不揃いな歌唱になる可能性があるため注意が必要である。

(a) 破裂音

《唇の破裂によるもの》

[b] 有声音

[p] 無声音：外来語のみで使用。

[b]、[p]の子音は、上下唇の破裂によって作られる。日常の日本語会話における発音では破裂が弱い。歌唱においては、上下唇を言葉が発せられる直前に閉めて息の圧力で外に飛び出すように発音する。その際、決して無理に唇に力をいれたり息を押し出してはならない。また、子音の後に続く母音の妨げにならないように、息の流れを止めたり、変えたりしてはならない。腹筋で作られる自然な空気の流れを崩してはならない。

《前舌と上歯茎によるもの》

[t] 有声音

[d] 無声音

[t]、[d]の子音は、前舌を上歯茎に当てて息を止めて、一瞬で舌を放すことで作られる。[t]子音の発音に際しては上記の[b]、[p]と同様な注意が必要である。[d]子音は、鼻音を伴う破裂音である。[t]子音より少し奥に舌が当たり、口腔と鼻腔の両方に息を流しながら発音する。言葉のはじめに出てくる[d]子音は、日常の日本語会話では聞き取ることができても、歌唱の際は聞き取り難くなる。[d]子音の発音の前に[n](ン)を意識して使うと歌唱する側の表現したい内容が伝わりやすくなると考えられる。

《舌根部と軟口蓋によるもの》

[k] 有声音・無声音

[g] 有声音

[k]、[g]子音は、[t]、[d]子音より少し奥の舌根部を軟口蓋に当てて息を止めて、一瞬で舌を放すことで作られる。今まで述べた子音よりも後方で発音するため、子音の発音後はそれよりも前で次にくる母音を発音するように注意が必要である。[k]子音は、言葉の高低により無声に近い発音になることがある。特に語尾の[k]子音は無声に近いことが多い。その際は、言葉ははっきりと発音しなければならないが、強く押し出す必要はない。柔らかく丸みのある発音をすると効果的である。[g]子音は、言葉の冒頭にくるものははっきりと勢い良く発音しなければならないが、語中や語尾にくる際は、主として[ŋ]と鼻音を使う場合が多い。

(b) 摩擦音

《上歯と唇の摩擦によるもの》

[f] 無声音

「フ」の発音は、日常の日本語会話においては[h]の上下唇の摩擦による発音のため不明瞭である。そのため歌唱教材や日本歌曲の歌唱の際には、上歯で下唇を軽く押さえ[f]子音を発音した後に母音の[u]母音を即座に発音する。しかし、言葉の中でイントネーションが低い際は、特に摩擦させる必要はないと考える。

《上歯と舌の摩擦によるもの》

[s] 無声音

[z] 有声音

[ʃ] 無声音

[ʒ] 有声音

[s]、[z]子音の発音は、前舌を上前歯の裏に軽くつけ、その隙間に息を流し、舌と歯の摩擦により作られる。[s]子音では子音の摩擦が、後に続く母音を発音するために舌顎を開けて発音する。歌唱の際は、[s]子音が持つ柔らかさを表現することも必要である。また、[s]、[z]が冒頭にくる際は、早めに準備行い摩擦を起こすことで明瞭に聞き取れることが可能になる。しかし、語中や語尾にある場合は、摩擦を意識しすぎると前後の言葉が聞き取り難くなる可能性があるため注意が必要である。

[ʃ]、[ʒ]子音の発音は、上歯茎と前舌の摩擦により発音される。特に[s]、[z]子音の発音より横に広くなりやすいため注意が必要である。[s]、[z]、[ʃ]、[ʒ]子音の発音の違いが混同しないように注意しなければならない。

[s] 無声音…サ・ス・セ・ソ

[z] 有声音…ザ・ズ・ゼ・ゾ

[ʃ] 無声音…シャ・シ・シュ・シェ・ショ

[ɜ] 有声音…ジャ・ジ・ジュ・ジェ・ジョ

また、[j]子音の発音は、日本歌曲を演奏する際は、多彩な働きをする子音であるため、時として有声音として扱う場合もあり、芸術作品である日本歌曲を歌唱の際は、無声音で扱うか、有声音で扱うかを研究する必要がある。

《声門の摩擦によるもの》

[h] 無声音

[h]子音は、日本語会話においてはごく自然な流れる呼気音で、非常に弱い摩擦による発音である。しかし、歌唱に際してはしっかりと発音しなければならない。しかし、息の流れの中で発音されなければ発声を崩しやすい子音であるため、多量の息と後舌と軟口蓋の摩擦に注意が必要である。

(c) 破擦音

[ts] 無声音…ツ

[tʃ] 無声音…チ

[dʒ] 有声音…ヅ

[dz] 有声音…ヂ

上記の子音は、破裂を伴った摩擦音であり、歯の裏に舌を当てて息を鋭く送り発音する。日本語の場合[ɟ]ジと[dz]ヂ、[tʃ]チと[dʒ]ヅは区別されることはほとんどない。しかし歌唱に際しては、摩擦音を使用するか破裂音を使用するかは、歌詞の内容を考慮の上、発音の仕方を確認しなければならない。

(d) 鼻音

《唇を閉じて息を鼻に通過させるもの》

[m] 有声音

上下唇を閉じて息を鼻に通すことにより作られる。日本語会話では意識することは少ないが、歌唱の際には唇を閉じ破裂音を発音すると同時に、鼻腔で空気を共鳴させなければならない。しかし、鼻にかけた「鼻声」にならないように注意が必要である。

《舌を上歯茎に当てて鼻に通過させるもの》

[n] 有声音

[ŋ] 有声音

[n]子音の発音は、前舌を上歯茎に当てて息を鼻に通過させた後、舌を一瞬で放すことにより作られる。破裂音を発音すると同様にできるだけ早く放す必要がある。冒頭で[n]が出てくる際は、[n]子音を意識して後に続く母音に繋げると聞き

取りやすくなる。しかし、語中や語尾にくる際は、息を柔らかく鼻に通過させた後に[n]を発音すると美しい日本語の発音に近づくことが可能となる。

[ŋ]子音は、舌を軟口蓋につけて息を鼻に通過させた後、舌を一瞬で放すことによって作られる。この発音は、語中や語尾で使うと効果的である。上記で述べたことと同様である。([g] 有声音)

(e) 半母音

半母音は一般の摩擦音に比べて摩擦が弱く、音色も母音に似ている。

《舌を上歯茎に当てて作られるもの》

[j] 有声音

「ヤ」、「ユ」、「ヨ」

[j]子音の発音は、前舌を歯茎に当てて[j]の子音を発音し、素早く「ア」「ウ」「オ」の母音を続けて発音することにより作られる。2音節にならないように注意する必要がある。

《唇を縦に丸く広げて作られるもの》

[w] 有声音

「ワ」、「ヲ」

[w]子音の発音は、[u]母音の発音と同様に上下唇を縦に丸く広げて、開放するところにより作られる。左右から前に突き出しながらはっきりと発音しなければならない。特に言葉の頭に[w]子音がくる際は、準備をしっかりとしておくことが必要である。[j]子音の発音同様に、2音節にならないように注意が必要である。

(f) 促音

語中にあり、他の音に付属して発音される。摩擦や中止的破裂で作られる。破裂音の時間を長くして発音する場合と、摩擦の時間を長くして発音する場合がある。促音も一音節と意識して歌唱することが必要である。

(2) 歌唱法について

上記で日本語の発音について述べてきたが、実際に歌唱へ繋げることを考えていきたい。既に本論文冒頭でも述べたが、日本の歌唱教材は明治期の西洋音楽を基盤に発展してきた。明治政府は欧化・近代化主義の一環として積極的に西洋音楽を取り入れた。まずは軍隊の音楽として取り入れ、その後唱歌として教育の分野に導入された。1872年(「学制」公布)に文部省が唱歌を重点に置いた小学校の音楽教育を認めたが、導入できる人材の確保ができず外国曲に頼らざるを得なかった。そのため日本人による唱歌の創作は難しく、西洋の歌曲に日本語を当てはめていくことで歌唱教材とした。

その後、1879年に文部省音楽取調係が設置され、『小学唱歌』が1891年に完成する。しかし、外国曲に日本語を当てはめた訳詞は不自然であり、日本人の作曲した歌が望まれるようになり日本歌曲の誕生となった。これまで、滝廉太郎や山田耕筰など実におびただしい数の日本歌曲が生み出されてきたが、今なお日本歌曲や日本語における歌唱教材の歌唱法については研究段階である。

ドイツ音楽を取り入れ発展してきた日本歌曲において、ドイツ語の特徴である「子音」を利用することで、よりはっきりとした日本語の発音に繋げる手引きとなるであろう。そして、日本語の大きな特徴である5つの母音の発音には、同じく5つの母音を持つイタリア語を参考にする 것도、発声を考えるうえで有効であると考えられる。イタリアでは「ベル・カント唱法(*bel canto*:美しい歌)」が確立している。この唱法を取り入れることでより歌唱の手助けとなるであろう。

本論文は、「ベル・カント唱法」を研究するものではないが、詳細の記述は省くが、18世紀イタリアで成立した歌唱法である。むらのない柔らかな響きと、広音域におけるなめらかな息の流れに重点をおいたものである。イタリア・オペラの普及とともに全ヨーロッパの音楽に影響を与えた唱法である。別名〈母音唱法〉とも呼ばれており、母音が同じポジションと同じ音色で繋がることでより美しい歌唱法とされる。日本語の母音「ア」「エ」「イ」「オ」「ウ」と極めて近い響きを持つイタリア語の「ベル・カント唱法」を発声に取り入れることは、日本語における歌唱法に大きく役に立つと、筆者は考えている。

3. おわりに

これまで、筆者の未熟な経験での研究にはなるが、歌唱の際の手助けになればと筆者なりに論じてきた。教員養成校や保育士養成校などでは、入学と同時に歌唱する機会が訪れる。筆者が担当している学生の中には、「歌う」という行為にかなりの抵抗を覚えている学生も少なくない。それはこれまでの環境や、友人たちとの生活の中で覚えてしまった感覚であると考えるが、保育士や幼稚園教諭にとって歌唱をすることは日常である。保育の現場では、日常生活習慣を身に付けるために、歌を使って覚えることを多く取り入れている。また、生活習慣を身に付けるためだけでなく、言語の発達を促すためにも大いに意義がある活動の一つである。学生が、「歌う」行為に躓きそうになった際に、「子音」や「母音」の知識があることで助けになることがあると筆者は考えている。

現在の学生は、幼い頃においても唱歌や童謡を歌う機会が少なく、j-popなどを聞く機会が多い時代に成長したため、馴染みのない歌唱教材を「歌う」という行為に抵抗を覚えることは十分理解できる。そのような状況でありつつも、教員も学生も日々の歌唱の授業において試行錯誤を繰り返しながら、歌唱技術の向上を図っているのが現状である。しかし、何が正しいのか、より良い方向はどのようなものなのか、漠然としているのではないかと感じている。そのような際に、筆者が論じてきたことが少しでもヒントになることを切に願っている。今後も、歌唱技術習得の向上に役に立つよう、引き続き実務を通して研究していきたい

と考えている。

【参考文献】

- 四家文子（1973年） 「日本歌曲のうたい方」 音楽之友社
- 大賀 寛（2008年） 「美しい日本語を歌う」 カワイ出版
- 星 旭（1980年） 「日本音楽の歴史と鑑賞」 音楽之友社
- 藍川由美（2006年） 「「日本のうた」歌唱法」 カメラータ・トウキョウ
- 河野保雄（2004年） 「音楽史物語」 株式会社芸術現代社
- 小林 淳（2002年） 「日本映画音楽の巨星たち2」 ワイズ出版
- 秋山邦晴（1978年） 「日本の作曲家たち—戦後から真の戦後的な未来へ(上)」
音楽之友社
- コーネリウス・L・リード（2010年） 「ベル・カント唱法 その原理と実践」
音楽之友社